

町民文芸



只見短歌会

三月詠草

大塚栄一

指導

馬場 八智

雪祭り老いし我など用なしがかすか聞こゆる花火に立ちぬ

関谷登美子

春光に輝きてゐる福寿草今年も愛でし幸を思ふも

新国由紀子

心臓弱き母の寢息に違ひあり身体起こして暫し見つむる

目黒 富子

診察を待つ間の我も何時の日か世話にならむか医療器具見つむ

渡部ゆき子

年ごとに薬の数のみ増え行けど歳よわいに勝てずや身は衰えぬ

渡部ヨリ子

忙しく立ちてコーヒー飲むわれが日課となりて心安らぐ

新国 洋子

スーパーより帰り来し娘は雪降りて野菜が高きと買い物少なし

(出詠順)

只見俳句会

四月定例会

目黒十一

指導

弘子

村に響く雪わり街道開く報せ

春服はためらい捨ててさくら色

礼

藁屋根の千の雫の雪解かな

春雪を踏み旅立ちの朝かな

一穂

梨の花ほころぶ頃よ味噌を搗く

甲子トンネル抜けて花々迎えけり

修一

雪間草合格メール届きたり

春浅しオープンカーのなびく髪

吉見

根の国に妻を待たせて桜餅

宮参り桜吹雪の磴のぼる

幸生

ぎぼうし汁齒茎鳴らして笑い食ぶ

つばくらめ先ず泥ふくみ家直しす

信

妖精の舞い降りたる北の春

一杯のコーヒーで語らう春の午後

都

彼岸寒素足のままの子等元気

行き交うは春のみぞれの傘重し

味代子

初物よ両手一ぱいの露の臺

彼岸会や母の字のある朱印帳

